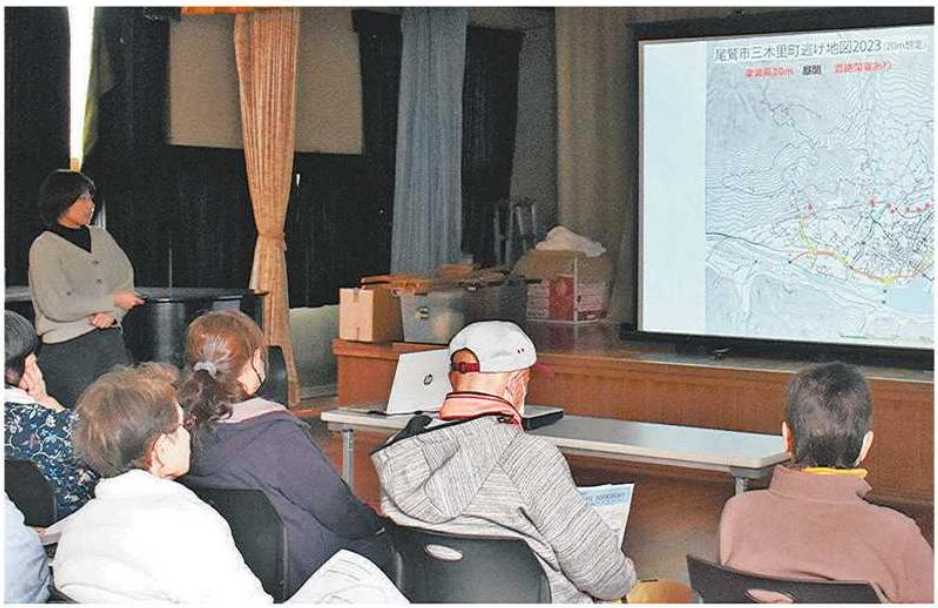
2024年02月27日 中日新聞 朝刊 14頁

事前復興構想、「逃げ地図」…

地域防災に大学生ら提言

尾鷲で合宿の成果報告会



逃げ地図を解説する学生（左奥）と耳を傾ける地元住民ら＝尾鷲市三木里町の旧三木里小で

尾鷲市三木里町で昨年夏に防災合宿を組んだ大学生らによる成果報告会が24日、旧三木里小学校で開かれ、住民ら約20人が耳を傾けた。被災後も見据えたまちづくりを目指す「事前復興」事業の構想も発表され、観光にもつなげる方向性を示した。（長尾祐樹）

生きるために 南海トラフ地震

合宿では昨年8月の5日間、愛知工業大や明治大の学生約50人と教職員が三木里町に滞在し、地域防災の課題を調査して解決策を提案。ある地点から避難場所にたどりつくまでにかかる時間を色分けして示す「逃げ地図」作りなどは住民も参加した。

愛工大院1年の丹羽菜々美さん(23)は、逃げ地図について、道路の閉塞（へいそく）や時間帯など、想定により高台に着く時間が5分近く変わると説明。「後期高齢者の歩行速度でも、おおむね12分以内に避難できる」と強調した。

芸術家の森脇環帆さん(50)は、逃げ地図を活用し、子どもたちがゲーム感覚で避難路を知る体験型アートプログラム「キツネを探せ！」の実践を振り返った。

プログラムの中で避難を諦めた高齢者と出会った子どもたちが、早く避難するか一緒に逃げるか葛藤する様子を紹介。「子どもに（災害時の行動について）迷いが生じたままになってしまった」ことを課題に挙げ、保護者や学生も交えた話し合いの場を設けるべきだったと指摘した。

丹羽さんは合宿を振り返り「三木里での活動を通して、内陸の暮らしでは想像できなかった津波災害を自分事として捉えられるようになった。残りの学生生活でも町での取り組みを続けたい」と話した。

明治大の山本俊哉教授（建築学）らは、旧三木里小を防災教育の拠点とし、非常時には避難場所にもなるように整備する事前復興の構想を明かした。周辺の避難路の整備や空き家の改修などにも取り組むため、会社を設立する。

防災と観光客増加の両立を目指しており、愛工大の益尾孝祐准教授（建築学）は「三木里町を日本の事前復興のモデルとしたい」と力を込めた。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています